

病院にて

吉村 卓也

責任と覚悟

医者にこんなに叱られたのは数十年ぶり。子供の頃、風邪をひいては通院していた近所の内科医院。「体がダルくて、熱っぽいので風邪だ」と思うんですが……。院長室から「風邪かどうかは俺が決めるから、早く入って来い！」

お化けも、お墓も怖いと思つたことは無いが、同居していた祖父と、この院長だけは本当に怖かった。結局聴診器を充てたり、喉をアイスクリームを食べるヘラのようなものでかき回した後で「うん！風邪だな！薬を出しておくからキチンと飲めよ！」

『だから、最初から言っているのに』思つても、口にはできない。祖父は十数年前に亡くなり、自分も引越しをして、怖い院長にも会わなくなり、この世から怖い存在は消えていた。

学校を卒業してすぐに入社した広告代理店。歓迎会を開いてくれたが、その場で直属の課長と喧嘩になり、課長は顔面血だらけ。以来、一年先輩の高校時代レスリングで国体出場経験者以外、自分に文句を言う人間はいなかった。

その先輩とは普段はとても仲が良く、いつも二人で飲み歩いてきたが、時には言い争いになり、向こうは体力に任せて、椅子、電話、灰皿、何でも投げつけて来る。こちらは、ボクシング経験者。飛んで来るものをよけることにはなれてる。レスリング対ボクシングの異種格闘技。そうなると、周りの人間も止めに入ることは出来ない。社長が「その二人、奥の会議室でやらせろ！」という始末。

もう、二十年以上通院しているこの病院。以前の担当医は何を言ってもニコニコと笑っているだけだった。そのドクターとも二十年位の付き合い。研修医の頃からの付き合いで、診察をサボろうが、薬を飲まずに「先生、薬は何故か余っています」と言つても叱られたことは無い。

今回初めての「循環器」。右足の親指に壊疽を見つけ、切断を覚悟して診察を受けたところ、それまでのドクターは呼吸器科が専門で、循環器に移す、という。出て来たのがこのドクター。最初は若くて美人で『ラッキー』と思つていたが、完全に舐めていた。思つたことははっきり

と言う。付度は一切なし。いつでも直球勝負。軟式野球で国体にも出場した自分は速球なら大抵の球は打ち返す自信はある。しかし、このドクターの投げるボールは「豪速球」。いつも「仰せごもつとも」となる。

一度こんな事が有つた。最初の人工血管移植手術の後、指の切断手術の間の外来で、褒めてもらえると思い、「こんなに真面目に薬を飲んだのは初めてだ」。褒められるどころか「当たり前でしょ！そのためこっちは薬を出しているのですから！」その時初めて、今までのドクターとの違いを悟つた！「怖い！」

「今日もはつきり言いますけど、この足が太ももから切断、と言うことになっても、私は痛くもかゆくもない！薬を飲みたくなかったら、命がけで飲まなければ良い！診察も受けたくないれば受けなければ良い！その代り、そうなたら私の存在も必要が無くなるから、その覚悟が有るのなら、そうしなさい！」

返す言葉もない。これ以上縮められない位に身を縮め、蚊の鳴くような声で「はい！分かりました」。その時は「まいったなあ！」としか

考えていなかったが、帰宅後良く考えると、そのドクターの強烈な責任と覚悟に気付いた。最初の診察の時から、我がことのようにこの足を心配し、何とか切断をしないで済ませられないか！あるいは切断するにしても、出来るだけ小さく済ますことを本気で考えていてくれた。それゆえの怒り。今日、改めて感じた、このドクターの責任と覚悟。毎日スクワットをしろ！という訳でもない、毎日素振りをしろ！という訳でもない。ただ、毎食後の薬と、食前のインシュリンの注射。自分のためにも、本気で自分を心配してくれるドクター、看護師さんへの感謝も含めて頑張ろう！

【追伸】 この件をいつものツイートに上げたところアツと言う間に数人の人から「真面目に頑張れよ！」の返事！ 今更ながらに「活かしてもらっている」と痛感。ちなみに、時間に余裕がありましたら〈takubon10〉でインターネッツを検索して下さい。

プロ集団

その病院の看護師は、テレビに出てくるような白衣にミニスカートという、色っぽい、いで立ちではなく、セパレートで、下はストラックス

と言う、ひたすらに機能性のみを求めた制服で、最初は「つまらない」という感想しか持てなかった。しかし、入院した翌日にはその答えが分かった。とにかく走る。まるで、内規に「歩くな！」と規定されているかのようにひたすら走る。「これじゃあ、スカートなんか履いては居られないだろう」と思うほど、走る。入院病棟の端から端まで約七十メートル。全力で走っても、息が上がらない。目測およそ一キロ三分くらいで走る。プロ意識の塊集団。

面白い看護師が居た。まだ若いだろうと見えるその看護師、日勤の時はもちろん、夜勤の時もメイクはバッチリ。髪は案の定上げているが他の皆のようにポニーテールではなく、頭の上でお団子を作り、スツピンの顔などは絶対に見せない。キャップ型のヘルメットをあみだにかぶり、スクーターにまたがるとそのまま夜の巷に溶け込み、何の違和感もないようなヤンキー。その辺にある白衣の背中に「夜露死苦」などと書けばびったりと似合う。日中は院内の廊下を暴走する。スクーターではなく、足で「走る」。速い。思わず「ヤンキー娘」とあだ名をつけた。

もう一人、名物看護師が居る。恐らく循環器科に所属しているのだろうが滅多にナースス

テーションにはおらず、「カテーテル室」いわゆる「カテ室」に居る。カテ室に入るには最低五年以上のキャリアが必要と聞いたが、その看護師はまるでカテ室の主。カテ室専用のモスグリーンのユニホームが良く似合う。まさに「国境の無い医師団」。さっそうと歩くその姿も格好良い。そう言えば、この看護師と主治医だけは走ったのを見たことがない。最初は遠目に主治医と気づかず、両手をブラブラさせながら歩くその姿を見て「なんだ？ あいつ お見舞いの様でもないし、まるで散歩をしているようだな」と思ったが、やり手女将が毎日部屋移動をするものだから、患者の名前を確認しながら歩いていることが分かった。カテ室の主、国境の無い医師団には「軍曹」と命名。我々の時代「軍曹」と言えば「コンバット」のサンダース軍曹。僕らのヒーローだった。

三度の入院で三度カテ室に入ったが、その顔を見つけるとホッとす。サラリーマンもそうだが、スーツを着慣れていない人間はすぐに「新人」と見抜かれる。軍曹はまるでカテを着て産れてきたかのようになじんでいる。プロっぽい。

四度目にカテ室に入った時、初めてのバルーン手術。手術台の近くに軍曹の顔が見えない。

少しの不安。代わりにヤンキー娘の顔。不安は増長される。局部麻酔で手術は始まった。有名な医師がどこから来て執刀し、主治医は第一助手で付くと言う。術中は思った以上にスタッフのおしゃべりが聞こえる。カテーテル自体は慣れて余裕があった。いよいよバルーンの開始。「痛かったら、痛いと言ってください」と第一助手。嫌な予感には本当に良く当たる。人生最高の激痛。この時とばかりに「いってえ〜！」カテ室中に響く大声。血管に管を入れて空気で血管を広げているようだ。十気圧の負荷だと言う。執刀医は三十や四十気圧を掛けることも有ると平然と言う。『他人の足だと思って』。痛くて声にならない。心の中で十を数える頃に執刀医が「解除」の声。楽になる。フウと一息つく間もなく「いって〜！」仕舞いには自分が執刀医。自分で「解除」。執刀医が「嫌々、まだ」という。何度か痛めつけられた後に執刀医の「終了」の声。その時に第一助手も含めてスタッフの顔が視野に入ってきた。スッポンポンの自分をのぞき込んでいる。「みんな俺の裸を見ているでしょ」「いえ、前張りをしているから大丈夫」と第一助手。前張り、と言ってもカトチャンペーのようなただの排尿器官になっている管が邪魔にならないように局部を絆

創膏で押さえているようなもの。

ふと見るとヤンキー娘がニヤニヤしているのが目に入る。身体を見られるのにも慣れてきたが「いって〜！」を聴かれたことが恥ずかしかった。しかし、その時に「軍曹」が居なかったことが救い。もし、あそこに軍曹が居たら「しつかりしなさい！情けない！」の一言も有ったと思う。第一助手はもちろん、ヤンキー娘も、軍曹もプロっぽい。老舗旅館の女将のように淡々と部屋割りをこなす主任、顔色一つ変えずに足を触り持ちあげて診察する主治医、走り続ける三年生、フォロワーするベテラン。正にプロ集団。恐るべき「レディース集団」。そういうプロ集団に生かしてもらっている。感謝。

目力の強い看護師

三十歳を過ぎた頃から入院癖が付いた。最初の頃は「血糖コントロール」一入院約二ヶ月。食事療法、薬事療法、運動療法。どこも、痛くもかゆくも無い入院。ただ、常に喉が渇く。喉が渇くから水分を補給する。当然トイレが近くなる。毎朝看護師が来て、前日のトイレの回数聞いて回るが、自分のトイレの回数など、数えたことも無い。前に聞かれた人が七回、と言

えば自分も七回。前の人が八回、と言えば自分も八回。いい加減なものだ。医師に勧められるがままの入院。分かれた女房が入院保険に入っていてくれた。おかげで、二ヶ月入院しても、給料は満額支給、一日入院費が二万円支給され、何の不自由もなく、検査の無い日は病院から魚釣りに出かけていた。

最初の頃は、退院後もカロリーを考えた食事をしますが、次第に「血糖値が上がったら入院をしてコントロールをすればよい」といい、自然とカロリーオーバーになる。血糖値が原因で引き起こされる「合併症」も、知識だけで、気にも留めない。

それは突然やって来た。休日明けのある日、明日からの仕事を考えて早めの就寝。息苦しさが目覚める。息を吐くことは出来るが吸えない。全く吸えなければ死んでしまうのだろうが、三吸って十吐くと言う具合。横になっても、ソファに座っても息苦しい。かかりつけの病院に電話。すぐに来い、との事。どこをどう走ったか覚えていないが、そのまま緊急入院。脊髄がどうとかで、肺に水が溜り、心臓が圧迫されて…：要は心不全。これが合併症の始まり。糖尿外来しか知らなかったが、心臓外科、整形外科、挙句に循環器。何故か病院は五臓六腑ばかりが

入院先、と思っていたが、「循環器」という呼称がピンと来ない。両足の血流が悪い、と言われても、どうするのか分からないままに入院。結局半年の間に三回入院をした。

最初の入院時にやけに「目力」の強い看護師が居ることに気付いた。何故か申し合わせたかの様に皆髪を上げ、後ろで束ね、マスクをしていると同じ顔に見える。

或る日お子ちゃまのような看護師が来て「嫌かもれないけど」と視線をそらさずに言う。何事か？告白か？と思うと、「私が主任看護師になる」という。こんなお子ちゃまに関心は無く「勝手になっていれば」と思ったが、正直残念ながら、目力さんでは無かった。

その入院時に右足人工血管移植手術。全身麻酔で気が付いた時は「回復室」。実はこの夜、事件が起きた（三年生と五年生参照）。右足が動かない。間違えて運動機能も切られたか？と思ううちに回復室から自室へ移動。主任が毎日入院患者の部屋割りをするのだが、毎日見事な部屋割り。新しい患者が入院するたびの部屋割りと移動。今すぐに老舗旅館の女将が務まるほどの部屋割り。二十五日間の入院で十一回の部屋移動、多い時には一日に二度の移動も有るほど、部屋移動。自分の部屋が分からなくなる。

そのベテラン女将が休日の時、持ち回りでリーダーが選出されると聞いたが、その日のリーダーは目力さんではなかった。

ベッドごと移動するその時、自分のベッドを右前方で引つ張って居るのが「ミス目力」と言うことに気付いた。その時点で、右足を自分で動かせなかったが、ナースステーションから随分離れた部屋に向かっている。何も言わない。

快適な入院生活を過ごす秘訣は、スタッフに嫌われない事と自覚していた。余計なことは言わない。即席リーダーは後ろでベッドを押している。「まだ足が動かせないようですけど、こんなに奥の部屋で良いんですか？」始めて聞くミス目力の声。「だって奥から来たら、ここしかないんです」即席リーダーの声。平面的に考えるともつともな判断。ミス目力はそれ以上何も言わない。しかし、その時にミス目力の真骨頂を見た。俯瞰的にそして、極めて立体的な思考をする人、伊達に「目力」が強い訳ではない。平面的に各部屋をベッドで埋めていく作業としては何の問題も無い。しかし、ミス目力はベッドを覗いていない。その上に居る患者を覗いている。しかも、病状、年齢、性格までも見抜いている。その上での判断。この強烈な目力はこの立体的で俯瞰的な観察力の裏付けた。心の奥底

まで見抜かれるような目力。摩周湖はその透明性を「見せる」ことで表現するが、ミス目力の透明性は「見抜く」。いや、気のせいだ。見抜かれるような思いにさせる。決して多くは語らない。相手が途惑うほどの透明性がその眼の奥にある。もう二十年若ければ間違いなく口説いていただろう。

この病棟にはもう一人、とんでもない看護師が居る。美形。恐らく病棟一の美形だろう。話しかけるのもためらうほどの美形。或る日、隣の患者が明日退院すると言う。前日消灯時間が過ぎた頃、その美形は隣の患者の所へ来て何やら小声で話している。寝つきが悪く、何となく耳をそばだてていると、退院後のケアについて、リーフレットにまとめてきて、説明をしている。美形が退出後、頼んでそのリーフレットを見せてもらった。凄い！ここまでやるか！と思うアフターケアのリーフレット。翌日その患者が退院した後、その美形と話す機会が有った。祖母の面倒を見ながら育った「おばあちゃん子」という。驚いたのは、結婚してからも、生まれ変わってもこの仕事を続けたい、という。ミス目力とは違った優しい目にははつきりとその決意が宿っていた。正に天使のような、看護師。

(了)